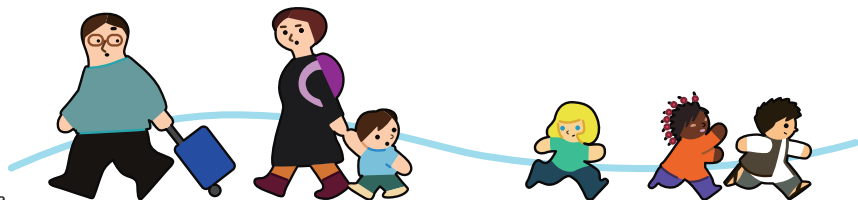


# ドイツで暮らす家族の生活とキャリア



Illustrated by Reona Nishinaga

二〇一九年春からフランクフルトで生活を始めた一家は、カルチャーショックとコロナ禍の一年目を乗り越えた。人見知りの長男は学校に慣れてきて、赤ちゃんだった次男も保育園に通いはじめ、ドイツでの生活は新たな段階に入る。

取材・文 松島 あおい

久美子と家族が暮らしているフランクフルト郊外の自宅周辺は緑が多く、家族全員がアウトドアの楽しさに目覚めた。近くの公園には大人でも登るのがたいへんなすっかりした遊具があるし、日曜日には家族でアスレチックパークへ行き、冬になるとソリ滑りをするなど、自然のなかで過ごす機会が増えた。

最近子どもたちと、Googleマップで東京を見ていて、「え、近所の公園こんなに小さかったっけ？」と驚いたそうだ。「いまでは、さらにもっと田舎に引越したいねという話をしています」

## 家族でいっしょに食事ができる生活

春になり天気がよい日には、あちこちの家の庭からBBQの匂いがする。「うちもBBQの台を買おうと、夫が言いだしました」

夫は料理をするのがストレス解消法の一つ。

「日本にいたころは、夫は深夜過ぎまで帰宅しなかったし、長男も八時半まで保育園にいて夕食を食べさせてもらっていました。だから食事は家族バラバラ。でもいまは、平日もできるだけいっしょに食事し、土日には夫も料理してくれるようになりました」

学校ではお父さんたちが普通に迎えをし、保護者のSNSにも参加している。

「びっくりするほど夫婦平等です。日本で働いていたころは、保育園で子どもが熱を出したら、まず私に電

話がありました。仕事をどうにか調整するのは妻の私。私がダメならお迎えに行くのはおばあちゃん。夫ということはあまりなかったです」

赴任当初は、日曜日にはすべての店が閉まってしまうのに驚いたが、いまでは日曜日は誰にとっても家族の日だと思う。日本とは違う日常の「不便さ」に慣れたのは、それだけではない。

「最初のころ、住んでいるマンションのエレベーターが故障して、いつまでたっても直らないので、信じられない思いでした。来週には直るの？と聞いても「hope」って言われて。結局八カ月かかったのですが、近所で怒っているのは私だけ。日本ではすぐに直るような恵まれた環境にいたので、許容範囲が狭くてイライラしていたのですね。

でもドイツにいるうちに私も許容範囲が広がって、いまでは「そんなもんかなあ」って笑って流せるようになってきました。そのことに自分でもびっくりしています」



自然に恵まれた環境のなか、冬は近くでソリ遊びもできる



ルービックキューブ好きな人たちが集う大会に参加した長男

## 人見知りも個性

現在長男は小学六年生、次男は五歳になった。インターナショナルスクールに通う長男は大人しいタイプだが、一昨年ESLを修了しようかとがんばって自信が付き、よく発言するようになった。

「日本にいたころは長男の人見知りをなんとかしたいと思ったし、学校の先生も私の悩みに寄り添ってくれました。でもいまの学校では、それが彼の個性とされ、『Good Listenerだ』と褒めてくれます。私も視点が変わりました」

長男の世界も広がっている。現在はまっているのはルービックキューブで、速さを競う大会にも出場しているそうだ。

学校でチェロも習いはじめた。ドイツは音楽教育が盛んで、レッスンは無料だ。発表会には間違えても気負うことなく参加することができ、気軽に人前で演奏する機会となっている。長男は学校のオーケストラにも参加して刺激を受けている。



次男とバイリンガル幼稚園の仲よしの友達

## 多彩な文化背景を持つ子どもたち

五歳になった次男は、現在ドイツ語と英語のバイリンガル幼稚園に通っている。親の方針というよりも、地理的な条件や受け入れてくれたタイミングなどから選んだのだが、次男には合っていたと思う。「次男は活発な性格で、公園でも知らない子どもたちが集まるなかに自ら入って遊びたいタイプです。近所の公園ではコミュニティのことばはドイツ語ですから、ドイツ語がわかると、どこに行っても楽しそうです。今後も、地元のサッカーなどに参加したりできるようにしたいなと思います」

バイリンガル幼稚園に通う子どもたちは多種多様な文化背景を持つ。ドイツ人との国際結婚の家庭が多いが、欧州だけでなくアフリカやアジア系も多い。英語もドイツ語もネイティブスピーカーではない

ない久美子たちのような家庭もある。そのような環境のなかで、子どもたちは幼稚園の年中ながら、誰がどんなことばで話すかよく見ているそうだ。

「私は誰にでも英語で話しかけるのですが、そうすると次男から、『〇〇君のお母さんは韓国語、あの子のお父さんはドイツ語だよ』などと言われます。ほかの子も、私に、『おはよう』と日本語で言ってきたりします」

一方、長男の通うインターナショナルスクールでは、英語が母国語でない久美子にも早口の英語で話しかけてくる子が多いそうだ。

「それぞれの家庭の文化もいろいろです。遊びに行つて、お迎えに行く時間を『何時まで!』ときっちり決める家もあれば、すごく大雑把な家もあります。アルゼンチン人の家で、『夕食もどうぞ』と誘われたら、食べはじめるのが遅い時間だったで、迎へに行くころにはうちの子は眠そうでした。」

でも自身は語学力に限りがあつて、いまも人と知り合つても深い話ができないことがストレスなので、息子たちはよい環境にいると思います」

## 母語を維持する大切さを痛感

一方で、悩ましいのは日本語力の保持



家族旅行でケニアへ行ったときマサイ族の人たちといっしょに

である。家庭では兄弟同士でも流暢に日本語で話しているので、一見問題なく思える。しかし小学二年生で渡独した長男は、高学年になって漢字などの習得が難しくなっていて、本も英語で読みたがるようになった。

「ドイツに来る前、海外子女教育振興財団に相談に行きました。そのときに、  
『母語の保持が大事です』と言われたのですが、当時はピンときませんでした。こんなに早く英語に切りかわってくるとは思ってもいませんでした」

ESLで学んでいたころ、家庭で何をサポートしたらいいかと相談したら、英語は学校でやるから、家では親が母語ではないことばで話さないように、と言われたそうだ。

「息子の英語は上達しても、母語は日本語だし、母語ができないと第二言語も伸びないので、いまは母語のレベルアップをしなくてはと思います」

最近日本からドイツに赴任して来た駐在員の家族に会うと、かつての久美子のように「子どもに英語を学ば

せたい！」と思っている人もいる。

「そんなとき、いまは私が『母語が大

事』と言っています」  
日本で出版社に勤めていた久美子は、一般的に子どもたちが難しい本や長い作品を読まなくなる傾向や、読解力をつける重要性と難しさを実感している。

### ここから世界を広げる

日本の出版社勤務当時は、仕事が忙しくたいへんだった。でもドイツに来て専業主婦となって、「私には仕事していることが大事だった」としみじみ思うそう

だ。  
「それがわかったのが、よかったと思います」

では仕事の何が大切なのでしょう。そう尋ねると、まず「人とかわり、世界が広がること」と即答した。

「もちろんドイツで新たに知り合った人もたくさんいます。でも学校で会うママ友とは子育ての話が中心。仕事で取材などをすると、まったく知らなかった世界が広がるのです」

現在もボランティアで日本語の記事のまとめを手伝うことがあるが、それも仕事とは少し違う。出世にはそれほど関心がないという久美子だが、ふと考えて「お金は……大事かもしれません」と言う。

「社会人になってから、ほかの人が稼いだお金で生活したことがなかったのに、いまでも夫ががんばって稼いだお金を自分で使うのが、申しわけない気がします」  
自分の使うお金は自分で稼ぐ、その「自立」が大事だと気づいたそう。しかしそれを実現するのは、現在の生活では難しい。

「私のことだけを考えたら、日本に帰って仕事をした方がいいかもしれませんが、子どもたちはいまここで友人をつくられているし、家族全員に影響が及んでしまいます。そして私が仕事を失ったことを嘆いてばかりいたら、夫も罪悪感を覚えてしまいますよね。だから悩みに向き合うより、いまの生活を楽しまうと、最近思うようになりました」  
ドイツに来てからできるようなったのは、自動車の運転だ。

「日本では完全なペーパードライバーでしたが、ドイツでは車で子どもの送り迎えをして、自信ができました」

コロナ禍の規制が解除されてからは、家族で旅行する機会も増えた。最近ではイタリア経由でスロベニア、クロアチア、ハンガリー、スロバキア、チェコを車で回った。アフリカにも旅することができた。

家族の世界はまだこれからも広がっていく。  
(終)

本欄では取材対象家族を募集しています。46ページのEメールアドレスへお気軽にご連絡ください。